

福音書を「絵巻」に

10年温め描ききる 今も続く「救いの歴史」

絵本作家、イラストレーターとして活躍して40年になるクリスチャンの上條滝子さん。写真下は、10年ほど前から、イエス・キリストの降誕から復活までの数々の場面を一枚の絵巻にするという思いを温めてきた。少しずつ描き続けてきたその作品がこのほど完成、一般財団法人キリスト教視聴覚センター(AVACO)の強い要望がけない、絵本として出版された。



キリストの生涯を描き、気が付かされていく。いた『ふくいんしよえまき イエスさま』(以下・福音書絵巻)は、楽器の acordeon(アコーディオン)のようだ。幾重にも折られた1枚の紙は、縦20センチ幅約13センチの20ページが連なり、全部広げると、長さ2メートル70センチの絵巻物語となる。絵巻の最初に描かれているのは、星を目標として砂漠を旅する3人の博士たち。それに続くイエスの降誕、洗礼、宣教、受難、十字架の死、そして復活までの61場面。文字のない一つ一つの場面を見つめるうちに、「救いの歴史」の中に「自分」が存在していることにまたイザヤ書や黙示録

など、当時のみならず、今も当時のままの巻物と空間は、天地創造から途切れることなく絵巻のように流れていて、私たちもその中に存在しているのだ。分断の無い世界

「光あれ」(創世記1章3節)という神の言葉から始まる「救いの歴史」。それは今も続いている。その「時間」は決して止まらない。聖書は、イエスの降誕を境目に「旧約」と「新約」に区切られているが、実際の「救いの歴史」の時間

実が知りたい」との思いが湧き起こってきたのだ。宣教師の勧めもあって、子ども向けキリスト教教材の挿し絵を描くようになり、そのために聖書を何度も読み重ねてきた。

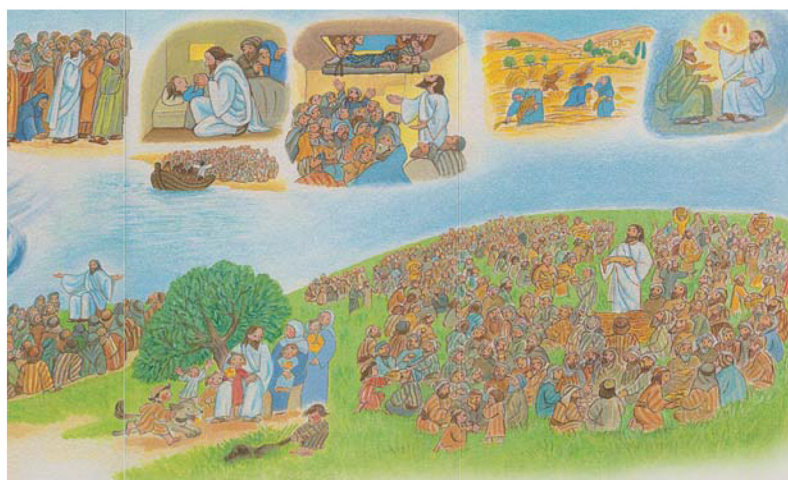
今回の福音書絵巻を描くにあたって、上條さんは、イエスの生涯が書かれている四福音書(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)を幾度となく読み返した。そして、当時の文化・風習、

いるもの。聖書は字づきものではなく、生きるためのものです」

上條さんは、自然を眺める時も、空や海に区切りが無いことに感動を覚える。葉や花びらの一枚も、その色に区切りがなく、見事にグラデーション(ぼかし)になっていることに見とれてしまう。それはまさに、神の創造の業で、「区切りの無い世界」を現している。

「神様のことは、分からないことだらけですが、分かっていることは、神様がいらつしやることと、『光あれ』という神の言葉から途切れることのない時間と空間の中に、私たち一人一人が存在しているということです」

「分断」の中にいる人間、そして連続と続いている神の「救いの歴史」。福音書絵巻で、イエスと共に旅をしながら、少しずつ「神の愛」に触れることができるかもしれない。絵巻の裏には、聖書に興味を持った人のために、場面ごとの解



『ふくいんしよえまき イエスさま』の一部

説と聖書箇所も明記してある。